奈良・いかるが便り　惜春号　　影山建樹

1、 水没する橋

清水の桜もいろいろに思い出されるが、斑鳩では、歌に名高い龍田川・三室山の桜が素晴らしかった。災害自粛といっても花は桜木人は宴会で、朱塗りの欄干が並んで架かる龍田公園のあちこちに、花見の宴の緋毛氈が並んでいた。

奈良北部の水を集めて大阪へ流れる一級河川が『大和川』で、聖徳太子が斑鳩に法隆寺を含む諸施設を建立したのも、この川による物資の集散があってのことと言われる。その両岸にも桜が沢山植えられていて花吹雪が凄かった。

しかし、車にとっては煩わしい道で、道幅は狭く、すれ違いは最徐行して柔らかな路肩への注意が必要である。龍田川との合流地点に近いところに水面から１ｍもない橋が架けられていた。私道ではなく公道で『大城橋』が正式名称。どこが大城か？　と驚くほどの小橋で、地図に記載がなく、すぐに水没するため「潜水橋」が通称。しかし、欄干もないこの橋を車が交互通行で通っている。斑鳩の人は勇気があるね。

2、 向こう三軒両隣り

わが家の西側には、以前は賑わったらしい休業中の瀟洒なレストランがあり、木々が繁って駐車場が小鳥の遊び場。建物の一角がパン工場と売り場になっていて香ばしいパンにありつける。

南家と北家はいずれも退職老人の家で、わが家を含めて三軒が静かな生活。これらを含めて一体が新興住宅地であり、建ぺい率ぎりぎりまで建物を広げ、僅かな所に植物を植えてあって、それぞれにこだわりのいろんな花が通行人を楽しませている。

わが家の東側は、朝一番に光が当たるいいところだが、コンクリートに囲まれた水路があるだけで、その向こうは工場で人影がない。わが家の先代の住人はこれを嫌ったようだが、私には嬉しい光であり、春の小川への訪問者である小鳥たちを観察できるのも良い。

3、 片桐石州と山岡鉄舟

法隆寺を北へ抜けると慈光院がある。バスから見えるところなので家内と出掛けてみた。

ここは江戸時代の始め、片桐石州が父の菩提寺として建設し、石州流といわれる武士の茶道を確立したところ。山門の脇に駐車場があって出入りに便利である。

よく拭き込まれた玄関を上がると、丁度中学生の修学旅行の一団が、若い和尚の話に聞き入っていた。その昔、我々も中学生たちに薬師寺や大仙院で経験させたことである。

今の私は耳が遠く、こういう説話が聞き取れないので、本堂にお参りをする。本尊は釈迦如来。天井に龍が描かれていて、手を打つと「ジイーン」と反響があった。

書院に戻り、大徳寺派禅寺のお庭拝見。借景として大和平野が一望できて素晴らしく、満月の夜に邦楽鑑賞などすれば素敵だと思われる。拝観料がちと高いと思っていたら、抹茶とお菓子が出てきた。頂きながら欄間を見ると山岡鉄舟の書。達筆で一文字読めなかったので老僧に尋ねると、全く関係のない話が次々と出てきた。訝しいので問い直すと、鉄舟と石州を聞き間違えて喋っていたとのこと。鉄舟は若い時分にこの地方で剣術と禅の修行をし、沢山の書を残したという。この寺では予約により「石州膳」というものが味わえるらしいが、檀家のない寺では、様々に観光客を集めないと経営が難しいらしい。

4、 奈良の旨いもん

奈良で「旨いものは何か？」と聞くと、ほとんどが「旨いものはない」と答え、そのあとから「三輪そうめん」「柿の葉ずし」「大和粥」などが顔を出し、次いで「大根・レンコン・コンニャク・苺・吉野葛」などと料理というより食材が並ぶ。

私が住むここは観光地であり、街道沿いに食堂やレストランが多いが、内容は他地域と大同小異で、これを奈良の味とするのは少し淋しい。清水から友人・客人が来られた際に、どこへ案内すればよいのかと考える。結局、大和平野の産物を生かした料理が「奈良の旨いもの」となり、料理人(例え小母さんであろうと)の腕の良いところが「旨い所」となるらしいが、それがどこにあるのか判らない。

歴史を生かした料理という宣伝も見かけたが、豪華な店で、曰く因縁を聞きながら一食が何万円もする食事はさぞかしと思うが、簡単に通うわけにはいかない。

近ごろのニュースとしては、ミシュランガイド関西編に、奈良の料理店をリストアップすると報じられていたが、庶民的に嬉しいのは、復元平城宮の東西市(いち)に当たる所で、B級グルメのコンテストが行われる知らせである。富士宮焼きそば・清水もつカレーなどに負けない「奈良旨いもん」が生まれることを期待する。尚、遷都１３００年祭で好評を得たものが随時復活するようで、静岡県人が復元努力した『遣唐使船』も展示される。

5、 東日本大災害への援助

百年に一度と言われる大災害に、日本中いや各国から援助の手が差し伸べられているが、この斑鳩町でも交流のあった岩手の大槌町の学童のため、文房具とタオルなどの日用品の提供を求める知らせがあった。

私共の転居の際、捨てられずに持ってきた物が在るはずなので探すと、ノートや筆記用具、寝具などいくらかの量となり、すぐに役場へ持参して提供することができた。

新聞をみると、こういう援助活動は奈良県内の各地で行われているようで、一日も早い復活を願わずにはいられない。

そうした好意に水を差す気は全くないが、気になったことが一つ。

ある地域で文具の提供を求めた際に、大量の新品の鍵盤ハーモニカやリコーダーが家庭から出されたとのこと。ずっと以前のこと、私たちも日中友好活動の一環として、中国の子供たちへの贈り物としてこうした楽器の提供を呼びかけたことがあるが、故障なく使えるか？　口にするものとして衛生面はよいか？　など、点検に気を使ったものである。
今回は大量の新品だという。なぜ、新品の楽器が家庭にあったのか？　ちょっと気になる。

6、 活動するお坊さん

奈良新聞には県内のお坊さんの活動がよく紹介される。京都と共に「宗教都市」といわれている奈良。寺院の数も多いから僧侶の話題が多いのは当然といえば当然だが･･･

昨近、多いのが東日本災害地へ出掛けたお坊さんの話題。未だに人数も確定し得ない被災者数。復興もままならず、どこにも祀られていない霊を慰めに出掛けた僧侶が、海岸で声を張り上げて涙ながらの読経をした記事。略式ながら弔いの儀式を次々に挙げて回る人。失われた寺院の復興に力を貸そうとする僧侶もいるが、「生きている人を救うのが宗教者の努め」と苦しみを抱えて生きる人の話を聞くことに徹して行脚する僧のこと。こうしたお坊さんたちに、きらびやかな衣の人はいないが、感心させられる。

7、 筒井順慶

京都から近鉄に乗ってわが家に最も近い駅が「筒井」である。筒井って何だっけと思っていたのだが、ふと『筒井順慶』の故地であることが判明した。

筒井順慶は戦国末期の人。筒井に城を構え、松永久秀などと対立しながら信長、光秀、秀吉との間を上手に生き、初代の大和郡山城主となった人である。久秀の大仏殿焼き打ち際にも合戦相手として登場するが、後に大仏復興にも努力する。

筒井城は秀吉により破却処分となるが、近鉄筒井駅の南側が城址になるというので行ってみた。しかし、狭い通りに人家が密集していて詳しくは判らない。墓は筒井の南の平端にあるらしいが、廟所は近鉄奈良駅の近くの伝香寺で、素晴らしい武人椿が咲くという。

8、 地域の独自性・和を以て貴しと為す

私が長年にわたって住まわせてもらったのは鳥坂の寺で、寺の行事が様々にあるから、プライバシーと言っても閉鎖的なものは在り得なかった。檀家の方々、法要の参列者、お墓の掃除にきた人、ちょっと寄りに来た人等々。本堂へ上がって休んで行くし、門などはないので、ガラス戸越しに声を掛けられることもあってかなり開放的である。

しかし、この斑鳩では少し様子が異なる。今まで戸惑いつつ来たが、この数日、近所の班長さんと話を交わせるようになって、やや理解が出来てきた。その詳細を報告するのがこの拙文の役目ではないので省略するが、以前に聞いたヨーロッパの話を思い出した。

ヨーロッパの伝統的都市の話である。芸術的保守的都市として深い文化環境を保ってきたが、近代化の波に押されて工場を誘致し、外国労働者の居住を歓迎した。しかし、ほどなく騒ぎが持ち上がる。伝統を無視し、文化を理解せず、ゴミを撒き散らす者は住民として認めないとする考えと、招いたのはそちら、合理性無視の伝統を押し付けられるのは迷惑とする人達。遂に暴力沙汰に発展して、仲裁が効かぬ睨み合いとなっている。と。

斑鳩がそれと同じだと言うのではないが、古くからの人と新しい人との意見の相違はあると思われる。ここ斑鳩は聖徳太子の故地。『以和為貴』が大切ではなかろうか？　袖触れ合うも多少の縁。門塀は解放すべきと思うのだが、空き巣や盗難も多いのだという。

9、 便利と不便・安心と我慢

わが家からすぐの所に交番と消防がある。スーパーは隣りで、パン屋が向かい。保育園や小学校、コンビニも図書館も近いし郵便局も銀行も•••

引越しの手伝いにきた妹たちも「便利でいいところね」と口を揃えるが、便利の裏返しは不便で、まずは絶えず聞こえるのがパトカーと救急車のサイレンの音。東に県立病院があり、南に救急医療施設があるので仕方ないところだ。

昨夜はわが家の前で救急車が止まったので、驚いて外へ出る。隣家のご老人がつまずいて転び、頭を打ったために救急車をお願いしたとのこと。担架で車に入ったご夫人。外から見ていても救急車の計器の波動が綺麗な曲線を描いていたのでやや安心。

夜中の火災報知にも驚いた。すぐ近くで鳴ったから、起きて二階の窓を開けて確認したが、消防車のサイレンも遠くへ行くし、火の手も煙りも見えず「なーんだ」で終わった。不満は言えない。安心と我慢も表裏一体。

国道２５号線を暴走族が通る。交番があるのに何故？と問うと、「彼らはポリスが居なくなると騒音を撒き散らして、消え失せるのだ」とのこと。トムとジェリーだね。

10、 集団古墳と靴下製造１００周年

来年は日本へ靴下の製造法が伝わって１００周年になるそうで、広陵町ではその準備に入っているという。

広陵町と聞いても清水の人には馴染みもなく、場所の見当が付きにくいと思われるが、法隆寺のある斑鳩町から大和川を越えて南側。交通は不便で、西名阪道路の法隆寺ＩＣを南下するのが最も良く、鉄道なら近鉄大阪線の「大和高田駅」であろうか。

広陵とは広い陵(みささぎ)のあるところという意味で、奈良盆地の広い丘陵地帯に、数え切れない古墳が残されている。とりわけ集中しているところが奈良県立広域公園として整備中の『馬見丘陵公園』で、220mの前方後円墳や、130mで日本最大の帆立貝式古墳から、夭折した皇子・皇女を祀ったらしい小型円墳・方墳など、まさしく古墳展示場の感がある。

考古学はともかくとして、古墳の間を歩いて豊かな自然に親しむことは素晴らしい。その馬見丘陵公園に隣接して『竹取公園』がある。竹取物語の話は京都嵐山付近や静岡でも富士山麓にあるが、ここでもかぐや姫に求婚にきたのは、この地の讃岐神社であるとして、竹取公園には竪穴式住居と高床式倉庫が復元されている。登呂遺跡に似た学習と憩いの場所、サッカー場が何面も取れそうな子供の遊びの場もある。

この施設を用いて冒頭の『靴下製造１００周年行事』が行われるという。広陵町は日本で最初に靴下の製造を開始した所。全国シェアーも高く、靴下の材料を応用した手芸でも全国的に有名だといわれる。

11、 青葉若葉の候

清水に比べると「桜前線」はかなり遅く、ゆっくりと移動して行ったらしく、どうやら青葉若葉の候となってきた。当方、未だに荷物や図書・楽譜資料の整備ができないが、眼をつぶって外へ行きましょう。

12、 お菓子の神様

♪♪　香りも高い橘を　積んだお船が今帰る　君の仰せを畏みて
　　万里の海をまっしぐら　いま帰るタヂマモリ　タヂマモリ　　♪♪

私が国民学校(小学校)で習ったタジマモリ(田道間守)の歌である。田道間守については九州伊万里訪問記で記したことがあるので割愛するが、奈良で田道間守を菓神として祀る『饅頭祭』があるというので出掛ける。近鉄奈良駅から近い漢国(かんごう)神社がその会場で、境内にある『林(りん)神社』の祭神・林浄因が本日の主神である。林は中国杭州の出身で1350年に来日。中国饅頭を真似て奈良饅頭を考案し、仏前に供えるために肉をやめて小豆と甘葛で今日の多様な日本饅頭の基を築いたといわれる。似た話が福岡にもあるが、詳しいことは私には判らない。

この神社の田道間守については、昭和５３年に紀州の橘本神社の御神影を頂いて合祀し、これによって林神社は饅頭・菓子の祖神の社として広く仰がれるようになったとのこと。

祭典はなかなかに鄭重なもので、終始、雅楽の生演奏があり、玉串奉奠に時間を掛け、宮司の挨拶、関係者の挨拶も念入り。終わって希望者には饅頭と抹茶が配られた。

♪♪　おはさぬ君のみささぎに　泣いて帰らぬ真心よ　遠い国から積んできた
　　花橘の香と共に　名は香るタヂマモリ　タヂマモリ　　♪♪　(旧仮名遣い)